

美術館ニユース 群馬の森

no. 193
2023 7/1

DEAN BOWEN

ディーン・ボーエン展

オーストラリアの大地と空とそこに生きる私たち

Australia: Land, Sky, Birds and Creatures

2023年7月8日[土]ー8月27日[日]

会場：展示室1

休館日：毎週月曜日（7月17日、8月14日は開館）、7月18日（火）

観覧料：一般 800 (640) 円、大高生 400 (320) 円

*（ ）内は 20 名以上の団体割引料金

* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者 1 名は無料

主催：群馬県立近代美術館

特別協力：ギャラリー宮脇

企画協力：アートプランニングレイ

後援：オーストラリア大使館

協力：日本航空



AUSTRALIAN EMBASSY TOKYO
在日オーストラリア大使館

オーストラリアのメルボルンを活動の拠点とするディーン・ボーエン（1957ー ）はさまざまな表現方法と、その豊かな想像力とユーモアで、オーストラリアという大地のもつ風土と自然と宇宙、そこに生きる大きなものと小さなものたちを表現してきたアーティストです。

ロイヤルメルボルン工科大学で版画を学び、のちさまざまな職業に就くもみずからの創作活動への意欲は衰えず、ヨーロッパへ渡って版画工房で研鑽を積みました。フランスでは「アール・ブリュット」の大家ジャン・デュビュッフェの作品とその表現のあり方を知ることになります。

やがて、オーストラリアで最高位ともいわれるフリマントル版画賞グランプリ（1994）、さらに大阪版画トリエンナーレで特別賞を連続受賞（1994、1997）しますが、版画や絵画だけでなく、彫刻や廃材からつくるアサンブラージュにも、表現の可能性を見いだすようになりました。彫刻の多くはまるでボーエンの版画作品から飛びだしてきたような「どこか平面的」な立体であり、アサンブラージュ（寄せ集め）であり、あまたのセルフポートレートともいえるでしょう。

また、ボーエンは幼時から身のまわりに生息する生きもの、オーストラリアに固有の動物たちにも親しみをおぼえました。自刻像の頭に載るハリモグラは祖母がボーエンのツンツンと逆立つ髪をハリモグラに喩えたことから生まれたものですし、彼の作品には、ワライカワセミ、コアラ、ウォンバットのほか、架空の鳥や昆虫までたくさん登場します。さらには、人々の暮らす家と、自動車や飛行機、船といった乗り物もしばしば登場しますが、それらは私たち人間の「どこか遠くへ旅立ちたい」という願いを表してもいるようです。

私たちの周りに広がる果てしない世界へ、南半球のオーストラリアでアーティスト・ボーエンの創作の冒険はつづきます。本展では、版画 80 点のほか油彩や水彩、ブロンズ彫刻、アサンブラージュ、アーティストブックなど、全 150 点をご紹介します。カラフルで可愛らしいモチーフをとおした、彼の自然や命へのまなざしをおたのしみください。

【関連事業】

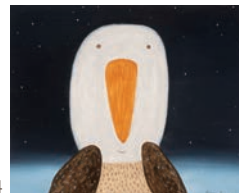
トークイベント

「ディーン・ボーエンの魅力」 登壇者：宮脇豊（ギャラリー宮脇代表）／友井伸一（徳島県立近代美術館学芸員）／太田佳鈴（群馬県立近代美術館学芸員）

8月12日（土）午後2時ー3時30分 会場：2F講堂 定員100名 申込不要、参加無料

学芸員による作品解説会

7月15日（土）、8月2日（水） 午後2時ー3時 会場：展示室1 申込不要、要観覧料



- 1 《黒いカナリア》Black Canary
2015年 リトグラフ、紙
ギャラリー宮脇蔵
Collection Galerie Miyawaki, Kyoto
- 2 《ジェントル・ボーイ》The Gentle Boy
2018年 アサンブラージュ（着色した金属、ほか）
作家蔵 Collection of the artist
- 3 《ムーン・ドッグ》Moon Dog
1998年 エッチング、アクリル、ドライポイント、紙
ギャラリー宮脇蔵
Collection Galerie Miyawaki, Kyoto
- 4 《夜のワライカワセミ》Nocturnal Kooka
2012年 油彩、板
ギャラリー宮脇蔵
Collection Galerie Miyawaki, Kyoto
- 5 《ぼくの頭にのるハリモグラ》Echidna on my Head
2006年 ブロンズ
作家蔵 Collection of the artist

こどもとおとなの夏の美術館

2023年7月22日(土)～8月27日(日)

夏休み期間中、募集制のワークショップや、どなたでも自由に参加いただける創作体験など、美術に親しんでいただくための多彩なイベントを開催します。申し込み方法、開催日時などをご確認の上、お気軽にご参加ください。

●ワークショップ「耳つき絵画をつくろう」【要申込／無料】

正方形のキャンバス全体を顔に見立てて、はみ出した「耳」の部分もうまく使って、顔＝絵画を作りましょう！

講師：原游（アーティスト）
日時：7月22日(土) 13:00～16:00
場所：2F アトリエ
対象：小学生～一般（小学3年生以下は保護者同伴）
定員：20名

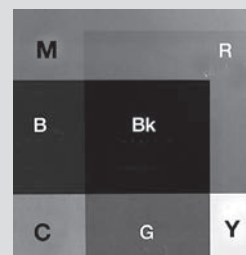


耳つき絵画

●夏のミュージアム・スクール「色・形・構図の基本を知れば、キミもアーティスト！」【要申込／無料】

美術の基本を体験しながら学べる3回連続の講座です。色、形、構図の基本がわかれば、作品の見方も広がり、絵も上手になるかも！

講師：当館職員
日時：7月29日(土)、8月5日(土)、19日(土) 各14:00～16:00
場所：2F アトリエほか
対象：小学4年生～一般 *3回すべてに参加できる方
定員：20名



色料3原色

【申込方法】 ※6月27日(火)から先着順
電話、Eメール、FAXのいずれかで、以下の内容をお知らせください。
①参加希望のプログラム名 ②お名前（複数の場合は全員）③年齢（複数の場合は全員）
④ご連絡先（電話番号／Eメールアドレス／FAX番号）
*電話受付は、9:30～17:00となります（月曜日と7/18を除く）。
*受付開始前の申込みは無効となります。

■ミニワークショップ「ばたばたバード」【申込不要／無料】

色画用紙と割り箸で、パタパタ動く鳥を作ります。

期日：7月23日、30日、8月6日、13日、20日、27日 *毎週日曜日
時間：各日10:00～16:00
会場：2F アトリエ



ばたばたバード

■ミニワークショップ「おりがみお手玉」【申込不要／無料】

折り紙を2枚使って、カラフルなお手玉を作ります。

期日：7月27日、8月3日、10日、17日、24日 *毎週木曜日
時間：各日10:00～16:00
会場：2F アトリエ



おりがみお手玉

■いつでも参加できるワークシート「美術館たんけんMAP」【申込不要／要観覧料】

美術館建築の見どころや隠された秘密を、ワークシートをたよりにたどっていきます。

申込み・問い合わせ先：群馬県立近代美術館・教育普及係 TEL 027-346-5560 / FAX 027-346-4064 E-Mail: bijutsu@pref.gunma.lg.jp

Museum ∴ Shop

友の会だより

◆ミュージアム・ショップより

*「ディーン・ポーエン展」をはじめ、当館で過去に開催された展覧会カタログも通信販売を行っております。申込方法など詳しくは美術館 HPの利用案内>ショップ>主要商品>ショップ通信販売をご確認ください。

*前号でもお知らせしましたが、クレジット・電子マネー決済をご利用いただけるようになりました。



ウイルス感染防止のためのアクリル板が撤去され、ショップのカウンター周りがスッキリしました。

お問い合わせ：群馬県立近代美術館 友の会 TEL 027-346-5560（館代表）／FAX 027-346-4064

[展示室2・6]

■日本と西洋の近代美術 II 7/8～8/27

【特別公開】ピカソ《ゲルニカ(タピスリ)》8/1～27

当館の収蔵品よりモネやルノワールなどの西洋近代絵画ならびに彫刻、明治から昭和にかけての日本近代洋画を紹介するほか、新収蔵作品を含む群馬ゆかりの作家の作品などを紹介します。また、8月にはピカソの原画による《ゲルニカ(タピスリ)》を展示します。

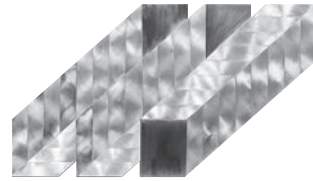


パブロ・ピカソ(原画)／ジャクリーヌ・ド・ラ・ボーム＝デュルバック(織り)
《ゲルニカ(タピスリ)》1983年(原画:1937年)

[展示室3]

■現代の美術 II 7/8～8/27

1960年代、前橋を拠点に活動した「群馬 NOMOグループ」の作品をはじめ、20世紀後半から現代までの日本現代美術を紹介します。



加藤アキラ《Space Compression》
1968年

[展示室4]

■砂盃コレクション 7/8～8/27

「群馬 NOMOグループ」の中心メンバーとして活躍した砂盃富男(1930-2001)は、コレクター、批評家としても知られました。今回の展示では、著書『ゲルニカの悲劇を越えて』(2000年)の主要テーマ「戦争と画家たち」に関わる作品から国内外の同時代美術まで、砂盃が独自の視点で蒐集したコレクションをご覧ください。



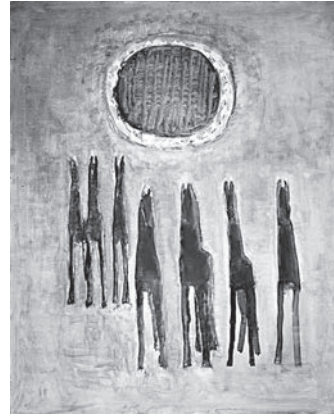
ジャン・フォートリエ《黒い人質》
1944年 寄託作品

コレクション展示

[展示室5]

■山口薫とゆかりの作家たち 7/8～8/27

当館所蔵作品から、山口薫の作品と、松本忠義や正田壤ら、山口ゆかりの作家たちの作品をご紹介します。



山口薫《金環色(鮎)の若駒》1968年

[展示室7(山種記念館)]

■ファイバーワークの世界 7/8～8/27

現代的なタピスリから織りという技法を展開したインスタレーションまで多彩な世界を紹介します。



藤岡恵子、佐久間美智子《静けさの回帰》1981年

T o p i c s

令和4年度 新収蔵作品紹介

この度、森村方子氏のご寄贈により、伊勢崎市に生まれた森村西三(1897-1949)の《苺模様鋳銅花瓶》を所蔵に加えることができました。本作は、2019年に当館で開催した「没後70年 森村西三とその時代」展に出品されました。

真ん中が大きくふくらみ、かわいらしい2つの持ち手がついた花瓶の中央部に、3つの苺と豊かな葉が配されています。みずみずしい赤い苺と緑の葉のコントラストが目に見え、自然に、写実的に表現されていますが、構図は厳格なまでに左右対称にデザインされています。大正末期頃に流行したおおらかで写実的な自然描写と洗練されたデザイン感覚が融合されて生まれた作品といえます。作家に近い親族のもとで、戦争中の鍋・釜の供出を逃れ、日常使い込んだ跡もみられる、美しくも逞しい1点といえます。



森村西三《苺模様鋳銅花瓶》大正末頃

ジョルジュ・ルオー(1871-1958)は、カトリック信仰を背景に、人間の罪深さと人生の悲哀、そして愛の貴さを描き上げた画家である。油彩画家としての名声が高いが、その生涯に365点の版画作品を制作し、版画芸術の世界にも大きな足跡を残している。年齢的には50-60歳代にあたる1930年代を中心に、ルオーは画商ヴォラールとの協働により『ミセレーレ』『悪の華』『流れる星のサーカス』『受難』など、主として銅版の連作というかたちで世に送り出す(『ミセレーレ』の出版はヴォラールの死により遅れて、刊行は1948年となる)。民衆の間で作品が生き続けることを望んだルオーにとっては、油絵よりも安価で、しかも複製が容易な版画というジャンルに挑むことは大きな意義を持っていたといえよう。

ルオーの版画は、どれも銅版などのあらゆる技法を駆使した高い完成度と、連作であるがゆえの緊密な構成、高いテーマ性を備えている。ルオーが準備したものは素描であって、版刻や刷りは熟練のG.オーベール(木口木版)やジャックマン工房、ラクリエール工房(銅版)が担当したが、技法の選択からインクの色指定に至る全体を監修し、また、たとえば銅版画ではエリオグラヴィール、リフトグランド・エッチング、アクアチント、ドライポイントなど様々な技法を重ね、さらにスクレイパーやバニッシャーなどを用いてニュアンスを与えている。

『流れる星のサーカス』(1938年刊行)はルオーが幼い頃から親しんだサーカスの芸人を、ステンドグラス職人であったことを思い出させる太く黒い輪郭線でくっきりと描き出している。ルオーはすでに1930年に同じく多色刷りの『サーカス』を出版しているが、満足のいく出来映えでは無かった。本作はその経験を活かして、色彩、構図ともより印象的なものとなっている。『流れる星のサーカス』には17点の多色刷りの銅版画と74点の木口木版画が納められ、17点の銅版画では、シュガーアクアチントで作られたモノクロームの版の上に色刷りのアクアチント2版を重ねた深みのある色の輝きが際立つ。

〈眠れ、よい子よ〉は、衣装を身につけた芸人が、楽屋に置いたゆりかごのなかの子どもと共に描かれる。ルオーが敬愛する芸人たちの堂々たるポートレートが連なる本版画集の中で、華やかな衣装から見て踊り子であろうか、母親でもある芸人が子守歌を歌う素顔ののぞく印象的な1点である。



ジョルジュ・ルオー
『流れる星のサーカス』より
XVII〈眠れ、よい子よ〉
1935年、31.0×21.2cm
シュガーアクアチント、アクアチント、ルーレット、ドライポイント、スクレイパー・紙

次回展覧会案内

創作において自由なる競創 — 19、20 世紀の芸術家とポスター

Un concours libre d'esprit dans la création entre 1860 et 1960

2023年9月16日[土] - 11月12日[日]

会場: 展示室1

休館日: 毎週月曜日(ただし9月18日、10月9日は開館)、
9月19日(火)、10月10日(火)

開館時間: 午前9時30分 - 午後5時(入館は午後4時30分まで)

観覧料: 一般800(640)円、大高生400(320)円

* () 内は20名以上の団体割引料金

* 中学生以下、障害者手帳等をお持ちの方とその介護者1名は無料、
群馬県民の日(10月28日[土])に観覧される方は無料

主催: 群馬県立近代美術館

企画協力: 創絵社

1 8世紀末に登場した広告媒体であるポスターに新たな表現の可能性をみいだした芸術家たちは、互いに競うように、観る人の印象に残る、想像力豊かで、ときに遊び心のある作品を創り出していきます。この展覧会では、19世紀ポスターの先駆者たち、シェレ、ミュシャ、ボナールなどにはじまり、主に20世紀の巨匠たち、ピカソ、マティス、シャガール、ミロを中心とした作家たちによるポスター約160点をご紹介します。色鮮やかで心躍るポスター作品による百花繚乱の競演をお楽しみください。



アンリ・マティス
《ボンパードール夫人 パリ装飾美術学校の舞踏会》
1951年 個人蔵

